

2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	宮本佳範
最終学歴	学位	専門分野
名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 博士後期 課程修了	博士（人間 文化）	社会学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

観光に関する専門的知識を教授するとともに、観光を題材に幅広い教養および社会人として広く求められる力（いわゆるジェネリックスキル）を育成する。

【目標】

観光分野に興味を持つ学生（特に観光実務士プログラムを意識して受講している学生）に対しては、専門教育として観光に関する知識や観光に関する諸問題に対する考え方を理解し、考察する能力を育成することでそのニーズに応えることを目標とする。それ以外の学生に対しては、観光に関する内容を授業のなかで幅広く周辺領域、関連知識に話を広げるなかで、一般常識・教養等を身につけるとともに、グループワークや発表等を通じて社会人に求められる力を育成することを目標とする。

【方針】

対話とアクティブラーニングを重視し、教育効果を高める。

【計画（方法）】

基礎的な知識を学生に教授することを目的とした講義では、学生への発問など対話を多く取り入れることにより、学生の参加、学生自身が考える機会の創出につなげ、集中力と理解の増進を図る。3・4年生向けの応用系の講義科目では、グループワークや学生による発表などの機会を積極的に取り入れた授業を展開する。

ゼミでは、企業との連携を図るとともに、これまで通り主に外部のコンテストへの参加を目標とすることで、学生のモチベーションを高めていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

観光マネジメント、地域観光論、観光資源探求、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

観光学、レジャー産業論、現代観光論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

理念として、「観光に関する専門的知識」だけでなく、教養および社会人として広く求められるジェネリックスキルの育成を掲げているため、各授業のなかで、専門的知識の伝達だけでなく、教養や主体性、協調性、表現力などのスキルを養えるような教育実践を行った。具体的には、地域観光論、現代観光論、レジャー産業論、観光資源探求などで、授業の一部にグループワークや発表を取り入れた。

また、ゼミでは主体性の育成と創造力、表現力を養うために、観光を題材として様々な取り組みを行った。2年生のゼミでは、例年通り JAF 主催の「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」に取り組んだ。そのなかで1チームは、最優秀賞は逃したものの、コンテストの本戦に残ることができた。他のチームも学生たちはそれなりに積極的に取り組むことができた。

3年生のゼミでは、「あいち観光まちづくりアワード」に取り組んだ。残念ながら本選出場を果たすことはできなかった。

もっとも特徴的な教育実践は、JR 東海バスとゼミとの産学連携企画（2年目）として、2～4年の有志で「知多3大ものづくり0距離見学！」というバスツアーを企画し、実施した。

○作成した教科書・教材

例年通り、観光学および観光マネジメントでは教材として重要事項をまとめた穴埋め形式のプリントを作成した。同じく教材として4年生のゼミでは、「卒論の書き方」を作成した。

○自己評価

講義形式の授業においては、当初の計画通りグループワークや発表といったアクティブラーニング型の授業を実施することができた。ゼミ活動においても、計画していた取り組みを円滑に実施することができた。2～3年有志によるバスツアー企画については、計画した3日程すべて催行することができた（参加者数は合計約70名）。参加した学生たちの成長は著しく、座学にはない貴重な学びの機会を提供することができた。

以上のことから、当初の計画を十分に達成することができたと考える。

II 研究活動

○研究課題

観光者のリスク認識等に関する研究

○目標・計画

【目標】

2024年度からも引き続き科研費に採択されたので、その研究課題を進めていく。

【計画】

ここ数年、新型コロナおよび体調等の問題で実施することができなかった海外調査を実施する。問題は学務との調整および体調であるが、昨年度までの科研費ではほとんど成果をあげることができなかったため、実現可能な計画で実施したい。

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・宮本佳範「オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察－観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み－」『東邦学誌』第51巻第1号、pp.1-13、2022年.
- ・宮本佳範「少数民族観光における観光者の問題行動に関する考察－山岳少数民族が暮らすサバでの調査から」『日本山岳文化学会論集』第17号、pp.27-36、2020年.（査読有）
- ・宮本佳範「問題ある観光を行う観光者の意識－ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から－」『東邦学誌』第48巻第2号、pp.17-32、2019年.
- ・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理－ブータンの事例から－」『東邦学誌』第47巻第2号、pp.1-13、2018年.

- ・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー：ベトナムのファンシーパン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第15号、pp. 91-101、2017年。（査読有）

（学会発表）

なし

（特許）

なし

（その他）

なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金（科研費）基盤研究C採択 研究代表者 課題番号（24K15525）期間：2024年4月～2028年3月、研究課題名：観光者の問題行為としてのリスクテイキング行動に関する研究

○所属学会

観光学術学会 日本山岳文化学会

○自己評価

昨年度末でそれまでの科研費が終了したが、今年度は、新たに採択されることができた。その研究課題の一環で夏季休暇中にインドネシアを訪問し、観光者への聞き取り調査を実施した。日本人の個人旅行者を対象とした調査を企画していたが、予想以上に日本人個人旅行者がいなかったため、日本人以外も含めて調査を行った。結果については現在まとめ中であり、次年度論文として発表する計画である。ただし、論文執筆が予定より若干遅れている。全体としては概ね計画通り研究をすすめることができたと考える。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

配属された委員会（現時点では未確定）において自らの職責を果たす。

【計画】

委員会では、問題意識を持ち主体的にかかわることで、当該分野の業務の円滑な実施および改善に貢献する。

○学内委員等

教務委員会（委員長）、FD・SD委員会（委員長）、教養教育センター運営委員会（委員）

○自己評価

教務委員会は委員会業務にも慣れてきて、円滑に仕事を行うことができた。SA制度の見直しなど、自分なりに考えた提案などが大学協議会で承認されることができなかったことは残念であるが、その他の規定変更なども含めて十分職責を果たすことができた。FD・SD委員会においてはあらたな取り組みを行ったわけではないが、通常通り職責を果たすことができたと考える。教養教育センター運営委員会では、非常勤講師の選任などでそれなりに貢献することができたと考える。

全体としては、概ね職責を果たすことができたと考える。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

自分の専門分野に関連する学外からの依頼等に応え、社会に貢献できるよう努める。

【計画】

公的機関やメディア等からの求めがあれば、可能な限り協力する。また、高大連携授業や出張講義など、大学以外大学以外の教育の場における教育機会があれば積極的に行っていく。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

- ・東海テレビのニュース番組「ニュース one」4月15日放送の特集コーナーアレカラ「バブル期に各自治体へ1億円・・・「ふるさと創生」とは一体何だったのか」のなかで、同テーマに対するコメントを引き受けた。
- ・今年度は、広大連携授業や出張講義の依頼はなかったが、東邦高校の国際探求コースの模擬国連に参加する3年生6名に対して、テーマとなるオーバーツーリズムについての助言を行い、また、観光に関する個人研究を行っている同コースの2年生に対する助言を行った。
- ・ゼミで行ったバスツアーは地元の企業 JR 東海バスとの連携であり、地域連携活動として位置付けられる。また、同ツアーは、知多の三大産業の振興をかかげ、クラウドファンディング形式で実施し、利益の一部を三大産業の支援に回す取り組みであった。その点は社会貢献につながるものとする。

○自己評価

社会貢献や地域連携に関しては、当初の目的を十分に達成することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学生の相談等に対応する能力を向上させる。

VI 総括

教育活動、大学運営、社会貢献すべての項目において、当初の目標を達成できたといえる。ただし、研究活動については、自分のなかで今年度中に論文をほぼ完成させる計画でいたが、現時点でそれを達成できる見込みは低い。場合によっては追加調査も必要となることを考えると、当初の目標に若干到達していないといえる。大幅に遅れているわけではないので、次年度、挽回していく計画である。

以 上